

暮らしをきのこ色に染める

岐阜県立森林文化アカデミー 教授 ● 津田 格



写真2 きのこで染めた毛糸
左からアカヤマドリ、キクバナイグチ、カワラタケによる染色(いずれもミヨウバン媒染)



写真1 ロクシヨウグサレキンにより染まった材

2024年は記録づくめの猛暑の年でした。夏がダラダラと続き、秋があっという間に過ぎていく。一昔前は季節感も随分と変わったように思います。それでも秋はきのこのシーズン。岐阜県では野生きのこ栽培品と並んで売られている地域もあり、多くのきのこを店頭で見ることが出来ます。それらは食用として販売されているものですが、きのこの利用方法にはそれ以外にも様々なものがあります。

例えばメシマコブ、マンネンタケ、ブクリヨウ、冬虫夏草などはその薬効成分が研究、利用されています。また薬ではないですが、含有成分の利用としては、幻覚性毒を持つきのこを使ったメキシコの儀式が知られています。少し変わったものとしては、火をおこす際の火口としての利用があります。ヨーロッパの水河から発見された約5000年前の人物(アイスマン)の携行品の中からツリガネタケというきのこが見つかり、火口として使っていたのではと考えられています。様々な地域で同様に使われていたようで、日本でもツリガネタケを「ほくちたけ」と呼ぶ地域があるそうです。

さらに観賞用としての利用もあります。これはサルノコシカケ類やマン

ネンタケのような硬いきのこを置物としたり、ガラス瓶や水槽の中を苔などでレイアウトし、そこに小さな「ほど木」を入れ、きのこを発生させて楽しむものです。発光性のきのこであるヤコウタケの栽培も観賞利用のひとつでしょう。

このように様々な形できのこが利用されていますが、静かに流行っている(?)のがきのこを用いた染色、「きのこ染め」です。このきのこ染め、意外と古くから行われており、今から30年以上前の国内の染色専門誌でも特集が組まれています(月刊染織^a No.87)。それによると、アメリカの芸術家ミリアムC・ライスさんが始めたそうで、1970年代に出版された彼女の著書から世の中に知られるようになります。アメリカ以外に北欧などのヨーロッパでも広まったそうです。

日本でのきのこ染めによく使われる種としては、ヒイロタケやロクシヨウグサレキン(写真1)があります。ヒイロタケは朱色をしている硬質のきのこで、煮出して色素を抽出し染色に用います。またロクシヨウグサレキンは子菌類の一種でひとつひとつのきのこ(子実体)は数mmと非常に小さいものです。この菌による腐朽材は青く

くは洗濯や日光の影響によって色が徐々に薄れていくのが課題ですが、きのこの場合はどうでしょうか。この点については少し検証が必要ですが、植物とは異なった色素成分を含んでいるとされ、堅牢度(色が落ちにくいこと)も高いとされています。

またきのこ染め体験は森林や環境への関心を深めるきっかけになるかもしれません。一般に行われるきのこの採取は、「きのこ狩り」という言葉に象徴されるように食べることが主目的でした。そこではどうしても食毒に意識が集中します。しかし染色となるとそれにとらわれることはありません。食への欲望から解放されることで視野が広がり、これまで気にとめていなかったきのこも目に入るようになります。そういった林にどのように生えているのか、といった「きのこの生き様」も意識するようになるでしょう。身近な自然環境に多様な生物が存在し、それぞれに役割を果たしていることに気づくことは、私たち自身の暮らしを見つめ直すことにも影響してきます。きのこ色に染まった暮らしは自然に寄り添った暮らしにつながっていくのかもしれない。

関連するWebサイト
International Mushroom Dye Institute (<https://www.mushroomsforcolor.com>)